

SONRISA

そんりさ

Vol.154



グアテマラ。ゼネストがあった8月27日の憲法広場前
(エル・ペリオディコ紙のウェブサイトから)

グアテマラ汚職で騒然

- 02 グアテマラ揺るがず関税汚職 …… 石川智子・新川志保子
- 06 メキシコ先住民族領域の鉱山開発反対運動 …… 小林致広
- 10 メキシコの女性殺人 …… 山本昭代
- 14 エクアドルで環境NGOを立ち上げる …… 日暮邦行
- 18 ラ米百景「ウルグアイの元日本帝国海軍兵」 …… 伊高浩昭
- 19 ペルー音楽「ペルーのカウボーイ」 …… 水口良樹
- 21 「世界をつなぐ子どもの本」展 …… 網野真木子
- 22 メキシコの食「ワカモレ」 …… ミゲル・アクーニャ
- 23 ニュースクリップ …… サザエ

グアテマラを揺るがす関税汚職 —民衆の怒りが大統領辞任に追い込む

石川智子・新川志保子

今年4月にグアテマラ無処罰問題対策国際委員会(CICIG)(注1)が大規模な関税汚職を告発した。「ラ・リネア」と呼ばれる犯罪ネットワークで、税関をコントロールしてグアテマラに輸入される物品にかかる関税をピンハネし、毎年およそ20億米ドルもの金額を盗んでいたということが明らかにされ、グアテマラ社会に大きな衝撃を与えた。そしてこのネットワークの頂点には大統領オットー・ペレス・モリーナ(注2)と副大統領ロクサーナ・バルデッティがいることも判明し、怒った国民が抗議デモを行い、ついには大統領を辞任に追い込んだ。ペレス・モリーナは裁判にかけられることになり、現在身柄を拘束されている。グアテマラ社会を揺るがした激動の5ヶ月の動きは以下にまとめた。

ラ・リネア

この調査で明らかにされた関税汚職は、多数の政府高官が関与する構造的かつ大規模なもので、文書やメール、電話の盗聴などの調査によって、その全貌がほぼ明らかにされた。これまでに大統領・副大統領、国税庁長官及び前長官を含む高級官僚や公務員などが38人逮捕されている。が、逮捕者の取り調べで新たな関係者も判明しており、続々と逮捕者が出ています。

ラ・リネアは、国税庁長官から税関職員にいたるまでの戦略的なポストにメンバーを配置し、輸入品が税関に着いてから、関税の一部を吸い取るシステムを作り上げていた。例えば、コンテナが税関に到着すると、国税庁の職員が内容を調べ、それをラ・リネアに報告、ラ・リネアはその申告内容を税率の低い品(高級靴を安いゴム草履になど)に書き変えて、実際の関税額より安い金額(70%)を払わせる。そのうちの40%が国庫に納められ、30%が賄賂としてラ・リネアに支払われ、そして業者は関税を30%少なく払うということになる。つまり本来国庫に納められるはずの税金の60%は消えてしまってい

たわけだ。ラ・リネアは、詳細な品目別の関税割引表も作成しており、巧妙な横領システムを構築していた。その後の調査で、ペレスとバルデッティが就任前から関与していることがわかり、この2人が他の2名とともに横領額の61%の配分を受けていたとされる。

裁判官も共犯

また、この調査発表直後に逮捕された20人ほどの事件を担当した判事が、賄賂を受け取って彼らのうち6人を保釈していたことも判明、のちにこの判事は逮捕された。これは、組織犯罪が司法機関内部に人脈を持ち、腐敗が司法にも深く根付いていることをあらためて示すものだった。また、容疑者に有利な判決を得るために収賄などを仲介する弁護士グループの存在も判明した。保釈された首謀者3人は再逮捕され、悪徳弁護士3人も逮捕された。

他にも出てくる汚職の数々

一連の調査で、ラ・リネア関税汚職以外にも、多くの汚職事件が明らかにされた。中で重要なものは、社会保障庁汚職で、医療業務を無許可の企業に不正発注し、無責任でずさんな管理のために腎臓透析を受けた患者が36人以上死亡し、70人以上が危険な状態におかれているという事件だ。他にも、企業の便宜をはかって政府高官や司法機関にあっせん収賄、マネー・ロンダリング(1億2千万ドル以上)、公共事業汚職、警察の施設改修・車両修理費の水増しなど枚挙にいとまがないほど多岐にわたる汚職が明らかになっている。

市民社会の反応

グアテマラ社会に汚職と腐敗がはびこっていること自体は周知の事実であったが、今回のように極めて具体的で巨大な数字が明らかになると、市民の怒

りに火がついた。大統領、副大統領らの何をやっても追及されるはずがない、という厚顔無恥な態度がさらに怒りを煽った。すぐに市民が抗議の声を上げ始めた。ラ・リネア発覚の翌日4月17日、インターネット上で「今すぐ辞任を！」と称するグループが25日(土)、首都国家宮殿前の憲法広場での抗議行動を呼びかけ、当日は2万人を超える人々が集まった。年齢も様相も多様で、プラカードを手に、ラッパを鳴らし、フライパンをたたき、大統領・副大統領の辞任を要求、汚職の一扫を訴えた。広場は憤慨に満ちていた。

行動はその後も毎週土曜日に、首都や地方都市で続けられた。ソーシャルメディアでの呼びかけ拡散、都市部中流層が大規模に参加し、イデオロギーが異なる国立・私立大学の学生たちの連携もあった。動員も演説もない、一人一人の自発的な動きによる、全く新しい形の市民運動が生まれた。デモでは「私たちはすべてを奪われた、恐怖までも」「私は無知だった、あんたに投票してしまったのだから」「民衆はお前を解雇する」「ペレス・モリーナ、諜報機関の長官だったのなら、もうお前はクビになったことがわからないのか！」などのプラカードが踊った。

メディアの奮闘—エル・ペリオディコ紙

ラ・リネア汚職が明らかにされると新聞各紙やインターネット・メディアなどが事件の報道を大々的に行った。特筆すべきなのは、1997年の創刊以来一貫して汚職や、軍、政治家、組織犯罪の関わりなどについて報道してきたエル・ペリオディコ紙だ。社主でジャーナリストのホセ・サモラは度重なる脅迫、攻撃にもかかわらず追及の手をゆるめず、汚職追及報道の指揮をとった。今回の事件では、毎週日曜版に事件の全貌に迫る取材と関係者の詳細情報特集を掲載し続けている。

副大統領辞任・逮捕

5月8日、バルデッティ副大統領が辞任した。最高裁が彼女の免責特権剥奪請求を受理し、議会が捜査委員会設置に着手した矢先だった。出国が禁止され、口座・財産の差し押さえ、家宅捜査など、捜査



が進展し、8月20日に逮捕となった。バルデッティは起訴され、そのまま拘留された。検察が提出した証拠の中で、盗聴テープにペレス大統領の声が入っていることが判明し、大統領関与の決定的な証拠となった。

高まる大統領辞任の要求

「今しかない！ Ahora o Nunca!」

大統領辞任要求は、広範な社会セクターでさらに広がったが、本人は辞任を拒否し続けた。そんな中で、農民組織や学生運動が、8月25～27日の全国行動、そして27日のゼネストを呼びかけた。議会がペレスの特権剥奪を審議中、総選挙を10日後に控えていた時だった。各地で、これに呼応して抗議集会、デモ行進、道路封鎖などが繰り返された。これまでデモなど行われたことのない多くの地方都市でも自然発生的にデモがおこなわれた。首都では12万人以上の市民が集まり憲法広場を埋め尽くした。ゼネストには、国家弁護士事務所PGN、会計監査院も参加した他、国立病院や私立の学校も閉鎖され、ファーストフード店、多くの商店やレストランも店を閉めた。財界も前日までの態度を変えて、当日は抗議に同調した。

ゼネストでは、人々は大統領の辞任だけでなく、汚職の根絶、選挙・政党法の改正なども要求した。すべてが平和裡におこなわれた。軍の動員と暴力的排除も心配されたが、衝突も流血もなく(アジテーター、政党間的小競り合いなど一部ではあったが)一人の死者も怪我人でないという、グアテマラ史上

最大で、かつ平和的な市民抗議行動が展開されたのである。

各セクターの反応

グアテマラ経団連 (CACIF) : 2011年の大統領選ではペレス・モリーナを支持した。今回のスキャンダルでは、当初はペレスを支持していたが、8月になって大統領の関与が明らかになると辞任要求に態度を変えた。大統領を見限るCACIF系大臣（経済相、教育相、保健相、農牧相）や官僚2人も辞任した。

軍 : 終始沈黙を守り、ペレスと距離を保ち、批判の矛先が軍に向かないように努めた。

米国 : 米国大使は当初よりCICIG・検察への支持を明らかにし、汚職の浄化を要求した。中南米からの麻薬や移民の流入を止めたい米国にとって、グアテマラとメキシコ国境の管理には汚職の少ない政府とある程度裕福な社会が必要である。そのために「繁栄のための同盟」計画が提案され、毎年10億ドルを5年間拠出することになったが、それが途中で消えてしまわないためにも汚職を解決する必要があった。

一部のペレス支持 : 圧倒的なペレス批判、辞任要求が大きくなる中で、少数ではあるが、ペレス政権から経済的利益を受けていた団体・組織などがペレス支援デモを行った。この中には、政府との交渉の道を選び、政府に取り込まれて腐敗した組合運動の一部や、先住民民族・農民全国調整委員会CONICなども含まれていた。

大統領免責剥奪、弾劾へ

最高裁は、8月21日に検察・CICIGから提出されたペレス大統領免責特権剥奪請求を受理し、同月25日議会へ送った。8月27日議会で捜査委員会が設置された。そして29日、委員会は特権剥奪を議会に勧告。9月1日、議会は与党議員を含む全会一致（総数158名のうち、出席した132人全員が賛成）でペレス大統領の免責特権剥奪を決議。そして逮捕状が出された。これら一連の動きは異例のスピードで進んだ。

9月2日夜、ペレスは大統領を辞任し、3日未明、議会はこれを承認し、副大統領のマルドナドを大統領に昇格させた。ペレスは出廷し、供述した。この事件の予審担当判事は、逃亡の恐れがあるとして、

「私の未来を盗んだペレス」(El Periódico紙より)



ペレスを軍刑務所に拘留することを命じた。公判は今年12月21日に予定されている。

軍による体系的な腐敗・汚職の構造

組織的な汚職は、ペレス政権で始まったことではない。内戦中に対ゲリラ反乱鎮圧戦略を担った軍高官らが「影の権力」として、国家の資源を使い大掛かりなネットワークを築き、ゲリラの武器密輸入を発見するために税関の中にスパイ網を組み込んだのがその始まりだと言われている。82年以降ゲリラの勢力が弱まってからは、これはもっぱら裏資金の調達手段となった。このネットワークは、司法関係者、警察、財務省職員、検察職員、公共事業省職員などを巻き込んで国家組織の中核に入り込み、拡大していった。その活動は税関以外にも、公共事業、麻薬と武器の密輸、マネー・ロンダリング、車の強盗など多岐にわたった。このネットワークが解体されることなく、より精巧な組織に発展したのが、今回のラ・リネアだと言えよう。

中米財政研究所 (ICEFI) とOXFAM インターナショナルは、グアテマラの国家予算に関する調査で、2015年の国家予算のうち27億米ドル、国家予算全体の約29%が汚職によって失われている可能性があると発表している。

大統領選挙

選挙・政党法の改正なくして選挙をすべきではないという抗議の声の中、議会は法改正を行わず、結局9月6日に予定通り総選挙が行われた(投票率71%)。

大統領は過半数を得票した候補がいなかった。得票1位は国民統一戦線FCNジミー・モラレス

(23.85%)、2位は国民希望党UNEのサンドラ・トーレス(19.76%)、3位は刷新民主自由党Liderのマヌエル・バルディソン(19.38%)と、僅差ではあるが、トーレスの2位が確定し(9月15日選挙裁判所最終発表)、モラレスとトーレスの間で決選投票となることが確定した(投票日は10月25日)。

モラレスはコメディアンで政治の経験はない。退役軍人会Avemilguaの作った政党から出ており、軍・組織犯罪と以前から深い関わりがある。トーレスは前大統領アルバロ・コロンの元妻(前回立候補する時に現職大統領の家族は被選挙権がないために離婚した)で、麻薬組織から政治資金を受け取っているのは周知の事実だ。

数ヶ月前の調査では支持率1位(40%以上)で、時期大統領と予想されていたバルディソンも麻薬密輸に深く関わっているとされており、投票日の少し前に大統領の汚職を暴いたCICIGを攻撃する声明を出して人気急降下、彼への批判票がモラレスに流れ3位となり、今回も大統領にはなれなかった。

モラレスとトーレスではトーレスの方が「より悪くない」ということで、大統領を辞任・裁判に追い込んだ運動は、今度はモラレスを当選させないために力を注ぐことになる。モラレスと軍との関係は農村部ではほとんど知られていないので、これをどこまで周知するかがポイントになるだろう。逆に、ト

ーレスは、前コロナ政権時代に大統領夫人として、政策決定に大きな影響を持っていたと言われ、政治の経験はある。UNEを浄化すると約束し、それをある程度は果たしているようで、CICIGの調査でもUNEがかかわるような汚職もこれまでに摘発されていない。

最後に

司法改革のために活動してきた人権活動家のヘレン・マックさん(ミルナ・マック基金代表)は、今回大統領を辞任に追い込んだ人々の行動を、平和的な手段で変化を起こした市民による「革命」である、と評価している。そしてシステムや法律、議員について批判的に見る目をもったことを成果にあげる。今後の課題としては、都市部の運動と農村部先住民族の運動をどのように連携していくかと、今回達成できなかった選挙・政党法の改正、そして汚職の構造を改革するために不可欠な公務員法(職権乱用や職務違反をした者を懲戒免職にする)、公共プロジェクトに関わる許認可法(資格のない業者に請け負わせない)などの法改制や整備を行い、国家機関の浄化など、組織犯罪のメンバーを国家機関に入り込ませないシステム作りをあげる。司法の独立も必要。これらの実現のためにはもっと議論を深めていかなければならないだろう。

(注1) グアテマラ無処罰問題対策国際委員会CICIG

グアテマラ政府と国連の合意により設置された、国際的独立調査機関。目的は、影の権力にまでなっている犯罪組織ネットワーク(軍高官、官僚を含む)の捜査と、その法的処罰や解体を進めるべく、検察・警察他国家機関に協力し、司法機関強化を支援し、政策への勧告を行うことである。2007年9月に活動を開始し、2年ごとにグアテマラ政府が国連に継続支援を要請している。ペレス政権は、「次の継続は要請しない」と公言してきたが、4月の関税汚職の発覚直後、継続要請を余儀なくされ、この9月から第5期に入っている。

(注2) オットー・ペレス・モリーナ

ペレス・モリーナは、退役将軍で、内戦中の深刻な人権侵害や、軍内部から形成された犯罪組織への関与も指摘されている。イシル地域でジェノサイドが繰り返された80年代初め、同地域の軍事基地の指揮官だった。90年代に軍諜報局や大統領参謀本部のトップとして、多くの拷問や殺害を指揮したこと、また98年のヘラルディ司教殺害の責任などが疑われている。2000年に軍を退役した後、極右政党「愛国党(PP)」を結成した。治安問題が深刻化する中、2011年総選挙ではMano Dura(鉄拳政治)をスローガンに、治安改善や汚職対策を優先課題に掲げて当選した。

ペレス政権は、治安対策として軍隊を積極的に動員しているが、状況は改善されていない。また、鉱山・水力発電など大規模開発事業では、反対する住民を暴力的に押さえつけ、殺害や不当逮捕を繰り返し、紛争を深刻化させてもいる。

参考：Prensa Libre紙インターネット版、El Periodico紙インターネット版、Contrapoder誌 Plaza Publica, Envio誌、BBC Mundo インターネット版などでそれぞれ4月16日から9月20日まで

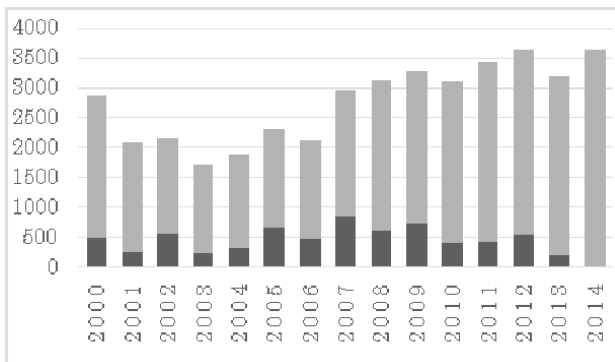
メキシコ先住民族領域における 鉱山開発反対運動

小林致広

国土の半分に鉱山開発権認可？

1994年のNAFTA成立後、メキシコ政府は国内外の企業に鉱山開発権を気前よく認可してきた。下表は、2000年以降の鉱山開発権が認可された土地区画（鉱区と表記）面積の変動を示したものである。制度的革命党（PRI）セディージョ政権期（1995～2000年）に3,492万haだった鉱区面積は、国民行動党（PAN）フォックス政権期（2001～2006年）に2,514万haと減少したが、カルデロン政権期（2007～2012年）には、3,437万haとPRI政権期レベルに戻っている

単純計算だと、3政権が認可した鉱区総面積9,443万haは、国土（19,189万ha）のほぼ半分に達する。しかし、期限切れ、認可停止、名義変更などを差し引いた実際に有効な鉱区の総面積は、国土面積のほぼ1割台で推移している。鉱区の対国土面積比が最も低かったのは2003年の7.6%だが、2007年前後から増加に転じている。この時期、プエブラ・パナマ計画がメソアメリカ・プロジェクトとなり、「環境に優しい持続可能なグリーンな経済」という看板が下ろされ、資源強奪の開発政策が露骨な形で展開された。2013年の外国企業が参画する鉱山開発事業は857件で、全体の7割を占めている。PRIペニャ・ニエト政権2年目の2014年には、有効な鉱区の対国土面積比は19%までに上昇している。



表：鉱区面積変動（■：有効、■：新規、単位は万ha）

鉱山開発反対と土地・領域防衛

連邦政府は、大規模開発がもたらす環境・社会的問題を見逃し、巨大重機を駆使した労働集約型で生産性の高い鉱山開発を実施できる巨大企業に鉱山開発権を認めていく。認可の乱発と並行して、共同体の土地・領域と関係する鉱山紛争が頻発しだした。ラテンアメリカ鉱山紛争監視機関によると、2013年以降、メキシコの紛争が急増しているという。

資源略奪からの土地・領域防衛を旗印にした抵抗運動の代表例は、メキシコ・中米諸国で組織されたメソアメリカ人民フォーラムである。メソアメリカ・プロジェクトが始まった時期から、開発や紛争のテーマの地域間連携が模索されていく。2008年結成の鉱山被害メキシコネットワーク（REMA）では、露天掘りの阻止・全廃が目標として掲げられた。2012年、メキシコ・中米の鉱山開発反対運動の調整機関として鉱山開発モデル反対メソアメリカ運動（M4）が結成され、「鉱山はダメ！生命は大事」を掲げ、行政地区や共同体単位で「鉱山開発拒否領域」を宣言する運動を展開している。

メキシコ先住民族領域の鉱区と紛争

2012年時点で、先住民族領域の有効な鉱区は約194万ha、先住民族領域（約2,803万ha）の約7%



地図：先住民族居住域の鉱山開発計画反対運動

となっている。国平均（16%）の半分以下だが、先住民族領域ごとの偏りは顕著である。北部国境地帯のバハカリフォルニア、ソノラ、チワワ州に居住する人口規模が小さい先住民族では、領域の3割以上が鉱区となっている。西シエラマドレ山地の先住民族タラウマラ、テペウア、コラの3領域合計は約103万haで、先住民族領域の鉱区面積の過半に達する。一方、ゲレロ州トラパネコ、オアハカ州サポテコを除き、南部では鉱区比率が5%を越す例は少ない。先住民族領域の有効な鉱区において操業段階のものは約10.6万haで、大部分は北部に分布する。

2012年時点の鉱山紛争は102件で、先住民族領域に関係するのは28件となっている。南部諸州の大部分は探鉱段階、西部のハリスコ、コリマ、ミチョアカン州では操業段階となっている。内陸部のサンルイスポトシ州やチワワ州南部では、外国企業の新規事業にともなう紛争が目立つ。

以下、先住民族領域の反対運動から、A：民族領域防衛型、B：環境破壊抵抗型、C：自然文化多様性の保全運動型の代表事例を取り上げて紹介しよう。

A：民族の聖地ウィリクタ防衛の戦い

サンルイスポトシ州北部のウィリクタは、先住民族ウィシャリカ（ウィチョール）の聖地の一つである。ウィリクタは、本来の居住地から400キロも隔たった東シエラマドレ山地の半砂漠地帯にある。人々は、毎年2月、儀礼に必要なサボテン・ペヨーテを求め、ウィリクタ西部の聖なる泉を巡り、北東部カトルセ山地の儀礼センターまで巡礼する。

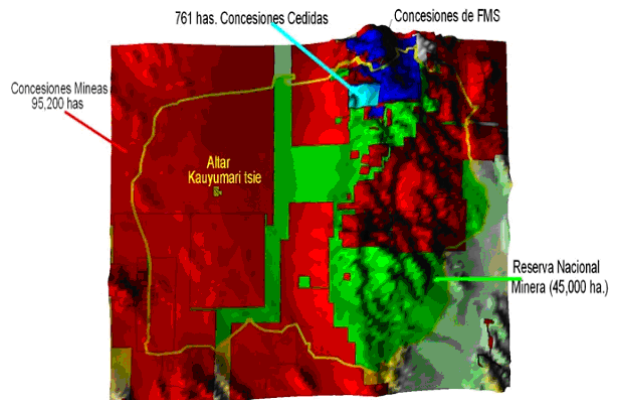
民族誕生の故地ウィリクタを民族領域として保全する運動は1990年代から始まり、ウィリクタ保護区（14万ha）は2001年に「ウィリクタ自然聖地」に指定された。1998年には保護区はユネスコの「世界自然聖地ネットワーク」に指定され、2001年には保護区北東部の銀鉱山リアル・デ・カトルセが連邦政府の「プエブロ・マヒコ」に登録された。

だが、保護区は略奪的な資源開発に曝され続けている。カナダ企業ファースト・マジスティック・シルバー社が東部に保有する鉱区6,327haの7割は保護区内にある。別のカナダ企業が保有する西部の鉱区約6万haと合わせ、保護区内にある鉱区は約9.8万ha、保護区面積の7割に達していた。

カナダ企業の鉱区取得が判明した2010年9月、西シエラマドレ山地のウィシャリカ共同体は、ウィリクタ防衛ウィシャリカ地域協議会を結成した。この協議会を核として、保護区周辺住民、先住民支援組織、エコツーリズム組織、環境・開発関係の市民組織などで構成されるウィリクタ防衛戦線（FDW）が発足した。2011年以降、FDWは、鉱区認可撤回と民族的聖地保全を求める運動を国内外で精力的に展開していった。「ウィリクタを救おう」キャンペーン（2011年10月）、ウィリクタ・フェスタ（2012年5月）などでは、大規模な動員が見られた。

こうした反対運動が高揚するなか、2012年5月、カナダ企業は聖地セロ・ケマードー帯の鉱区761haを返還することを表明した。自然保護区における鉱山開発のモデルケースを目指し、カルデロン政権は返還された鉱区を含む東部地区4.5万haを「ウィリクタ鉱山保護区」とする構想を表明した。

2013年9月、西部低地の鉱区一時停止という司法裁定が下され、ペニャ・ニエト政権は前政権の鉱山保護区構想を撤回した。西部低地の鉱区は正式に取り消されたが、坑道探鉱は環境破壊ではないとす



図：ウィリクタ保護区の鉱区と鉱山保護区

る論理で、停止の東部鉱区が復活する可能性もある。鉱山開発が保護区の地下水体系破壊をもたらすとして、FDWは聖地防衛運動を継続している。

B：露天掘りによる環境破壊と社会紛争 最大の鉄鉱山ペニャ・コロラダ

コリマ・ハリスコ州にまたがるペニャ・コロラダ鉱山では、1970年代末から露天掘りによる鉄鉱石採掘が行われてきた。露天掘りはコリマ州側で始まったが、現在では先住民族ナワが居住するハリスコ州アヨティラン・エヒード内でも露天掘り採掘が行われている。1998年以来、エヒードの土地400haは残土処理地として低額で貸出されていた。鉱山企業は、2009年に改定された借地料支払いを渋り、住民の生活基盤整備に対する援助も怠ってきた。現在、住民と協議することなくエヒード執行部が別の残土処理地（約800ha）を非合法で提供するという事態も生じている。同時に、残土処理による湧泉・河川の破壊、水質・土壌汚染、鉱石輸送にともなう水資源枯渇など、環境問題も深刻化していった。

2013年、エヒード住民は鉱山企業側が操業する現場を実力封鎖し、司法当局にエヒード内での操業停止を申請した。2014年9月、開発権取消し、残土処理・取水禁止という裁定が出されたが、企業側はそれを無視し、エヒード内に残土処理地を確保しようとし続けている。40年間で住民35名が殺害されるなど、鉱山企業側は準軍事組織を動員し、エヒード住民の反対運動を抑圧してきた。エヒード住民の粘り強い抵抗は、隣接するサクアルパンでの露天掘り金鉱山開発計画反対運動のモデルとなっている。

露天掘り金鉱山カリサリージョ

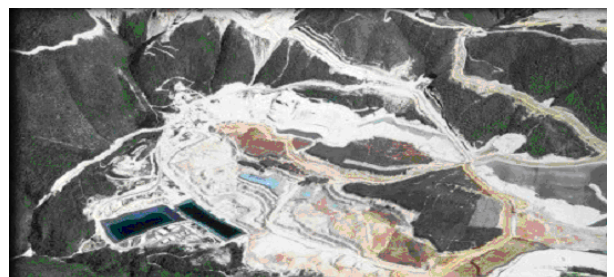
ゲレロ州タスコの南100キロにあるカナダ企業ゴールドコープ社のロス・フィロスは、メキシコ最大の金鉱山である。鉱山の大部分はカリサリージョ・

エヒードの土地（970ha）である。2007年からの露天掘りで、ロス・フィロス丘陵は姿を消し、谷にあった農地はシアン浸出処理場（約400ha）となった。

エヒードの土地1,400haの8割を提供したナワ系先住民の250家族に残された土地は250ha余に過ぎない。この土地で千名余りの住民が農業で生計を立てることは不可能である。エヒード構成員には年間1万ペソ弱、80家族には年間1,300ペソ/haの借地料収入があるが、大多数の住民は生活費工面のため村を出ている。

鉱山の西500メートルにあるカリサリージョでは深刻な健康被害が発生している。年間に排出され重金属・有毒廃棄物約1,700万トンの一部は土埃として村に舞い降りている。2012年の健康調査では、相当数の住民に眼（74%）、皮膚（66%）、呼吸器（57%）、咽喉（45%）の疾患が見られ、精神疾患も40%に達する。周辺メスカラ川流域では、ヒ素、カドミウム、鉛、水銀など重金属汚染が確認されている。

2014年5月の交渉で、借地料の3倍強の値上げと引き換えに土地提供の5年延長が合意されたが、住民にとって尊厳ある生活が確立されるめどはまったく立っていない。カリサリージョにおけ



写真：農耕地からシアン浸出処理場（2005年／2009年）

る環境破壊と社会分断の状況は、「天井のない地獄 (el infierno a cielo abierto) 」と形容されている。この悪しき事例は、2010年のゲレロ山岳部先住民民族トラパネコ居住域の英国企業による鉱山開発「闇の奥」計画 (5.9万ha) をはじめ、各地の様々な露天掘り鉱山反対運動で、開発による経済活性化という推進派の論理に対する有効な反論例として活用されている。

C: 「死のプロジェクト」 反対運動

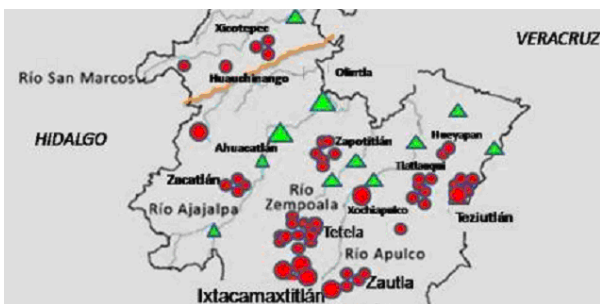
21世紀初頭、プエブラ州北部山地地域では、「死の計画」の一環として大規模鉱山開発計画が進行していた。「死の計画」と呼ばれる所以は、鉱山開発、ダム建設、地下水体系を破壊するフラッキングによる石油ガス開発が、地域の生態系や社会を破壊し、死に追いやるからである。2014年時点で、北部山地の鉱区 (約16.9万ha) は北部山地地域面積の約18%に達している。カナダの一企業 (アルマデン社) が鉱区の72%を占有し、22%がメキシコ企業のものとなっている。21世紀初頭に認可された鉱区の大部分は、対象鉱区の住民に対する事前協議抜きだった。各地区の鉱区で探鉱活動が本格化するのは2010年代で、2011年頃から徐々に市民社会による鉱山開発などに反対する運動が組織されていった。

最初に反対運動が組織されたのは、世界的大富豪カルロス・スリム所有のプリスコ社がテテーラ地区で推進していたエスペヘラ鉱山計画に対してである。2012年4月、鉱山開発による生態系破

壊に反対する市民組織「テテーラ未来に向けて」が組織され、地区首長も計画反対を表明した。2012年7月には、北部山地の「死の計画」反対運動を調整する地域横断組織「Tiyat Tlali (われらの領域防衛協議会)」が組織された。協議会には、トセパン協同組合連合、トトナカ・ナワトル先住民連合、プエブラ大地大学など多様な組織が参加していた。2012年11月のサウトラ地区トラマンカの住民集会では、探鉱作業中の中国系企業JDCが追放された。企業の要請で環境評価作業を行っていた環境資源省は、2013年10月、住民協議が不十分として作業中断を表明し、テテーラ地区の鉱山開発計画は休止状態となっている。

2015年には、アルマデン社がイシュタカマシュティラン地区で計画中のトゥルグティック鉱山 (1.4万ha) の探鉱作業の一部に対し中止命令が出され、プエブロ・マヒコに指定されたクエツァランとトラトラウィテペック地区にまたがる鉱区の鉱山開発計画に対する住民の異議申し立ても受理されている。

プエブラ州北部山地では、先住民農民運動、市民運動の連携で、自然文化資源を略奪する「死の計画」への抵抗が個別共同体の枠を超えた形で組織され、一定の成果を生み出している。REMAとM4の共催によって、2014年3月、サウトラ地区トラマンカで、メキシコ鉱山開発モデル抵抗住民集会が開催された。チアパス、モレロス、オアハカ州など国内のほかの地域で鉱山開発反対運動組織や、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、パナマで露天掘り鉱山開発反対運動からの参加者が、カリサリージョの「天井のない地獄」の実態、プエブラ北部山地の「死の計画」反対運動の体験を共有しあうことになった。



地図：プエブラ州北部山地の金鉱山鉱区●

メキシコの女性殺人—— シウダー・フアレスで、そして全国各地で

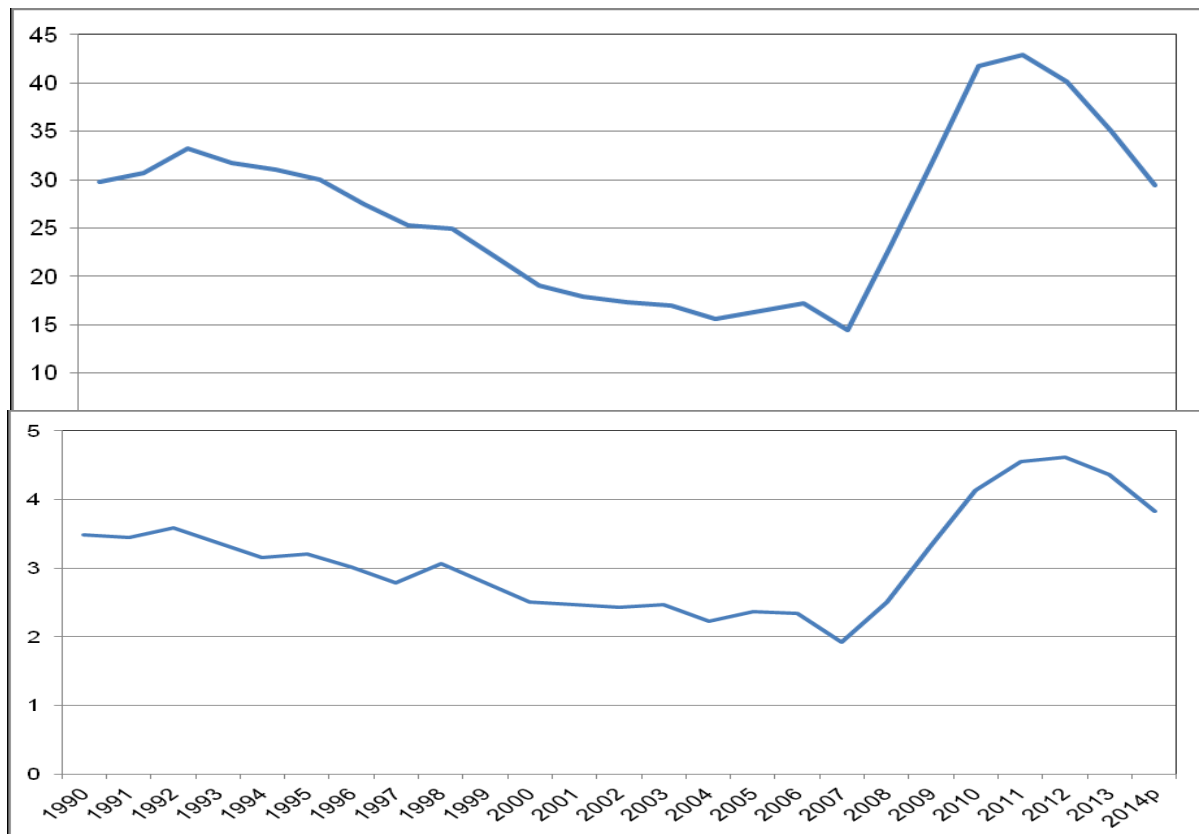
山本昭代

女性殺人——その現状

メキシコ北部国境の街シウダー・フアレスで、若い女性が次々に殺されている…謎に満ちた、おどろおどろしい話が巷をにぎわせてから10年近くがたつ。若い女性がなぜそれほどまでに犯罪被害に遭うのか？最近では北部国境地域だけでなく、メキシコ各地の都市でも、路上で惨殺されたり、ある日突然行方不明になったりするケースが目立ってきている。

メキシコでは現在、どれくらいの女性殺人が起きているのか。いま手に入る数字でもっとも新しいものが、今年7月にINEGI(国立統計地理院)が発表し

た2014年の暫定数である。これによると、2014年の全国での殺人被害者は19,669人、人口10万人当たり16人。そのうち男性は17,221人、女性は2,349人、性別不明99人。10万人当たりでは、男性は約30人、女性は約4人(グラフの指標の違いに注意)。いずれも2011年をピークに減少傾向にある。しかし必ずしもこれらの数字が実態を表しているとは限らない。行方不明者は増えており、被害者数を押し上げている組織犯罪関係の殺人では、身元が特定できないように、犠牲者を埋めたり焼いたりするようになったのだ。



1990～2014年の男女別殺人被害者数の推移(上=男性、下=女性)

http://www.inegi.org.mx/saladeprensa/boletines/2015/especiales/especiales2015_07_4.pdf#search='homicidio+2014+INEGI'

では、メキシコでの女性が殺人被害者になる割合は多いのか？ 2014年の女性被害者は、全体の約12%。UNODC(国連薬物犯罪事務所)の統計(2012)によれば、カナダは女性の被害者が全体の30%、アメリカ合衆国は22%。メキシコでの女性が殺害される割合が、世界的に見て必ずしも高いというわけではない。しかし、女性が女性である、体格や経済力、社会的地位などの点で弱者であり、性的な目的などのために殺されるという点において、メキシコでの女性殺人は考える必要がある。

ちなみに、メキシコ国内で人口当たりの殺人の発生割合がもっとも高いのは、2013年以来、チワワ州を抜いてゲレロ州となっており、3番目がシナロア州である。発生件数では、人口密度の高いメキシコ州が最多である。

組織犯罪の関与

今年2015年7月、シウダー・ファレスで2011～2012年に起こった11人の女性殺人事件に対する公判が行われた。ファレス・カルテルにつながるギャング組織「ラ・リネア」によるもので、6人の被告人のうち5人に697年の懲役と被害女性の家族への賠償金84万ペソ(約600万円)の支払いが命じられた。

被害女性らは失踪当時15～20歳で、仕事を探して訪れたファレス市中心街の市場周辺で、言葉巧みに誘われて監禁され、強制買春させられていたとみられる。しかしほかにも少なくとも16人の女性が同じ場所で殺害されており、またファレス市中心街で同様の状況で行方不明になった若い女性も数多く、同グループの関与が疑われる。しかし証言予定だった女性が殺害されたり、被害者家族が脅迫を受けるなど、訴えて出ること自体に大きなリスクがある。

女性らの白骨遺体が発見された土地は、2008年以来、チワワ州における「麻薬戦争」のために軍や連邦警察の部隊が駐屯していた場所に近い。その間、土地の所有者を含め、住民らは足を踏み入れる

犠牲者らが発見された場所に十字架を建てる活動家ら。<http://www.proceso.com.mx/408907/2015/06/27/juicio-por-feminicidio-implica-a-narcos-policias-y-soldados>



ことはなかった。このことから、またほかの証言からも、軍・連邦警察の関与が深く疑われている。さらに組織は刑務所に売春婦として女性たちを送り込んでおり、刑務所関係の公務員らの関与も明らかだが、その点にも捜査は及んでいない。

組織は、誘拐した女性たちの一部をアメリカなど国外に送り込んでもらったともいう。誘拐された女性たちの多くに共通する点は、若くて細身で、髪が長く、やや浅黒い肌、身長は165センチ前後。このような特徴がある点が、ほかの州での女性殺人や行方不明事件と異なっている。

これまで、被害に遭った女性らにかんしては、しばしば性的サービスに従事していた、ギャングと付き合い合っていた、家庭内や恋人からの暴力の被害者だったなどと説明されることが多かった。そのようなケースも当然あるが、それとは異なり、組織暴力によって拉致・監禁され、殺害されているケースも少なくない。

シウダー・ファレスとは？

チワワ州シウダー・ファレスは人口約132万人、チワワ州最大の都市である。国境を流れるリオ・ブラボ(アメリカではリオ・グランデと呼ぶ)を隔てたテキサス州エル・パソとは、もともと1つの都市だったが、米墨戦争でメキシコが敗れ、国境の北側がアメリカ領とされた。現在、ホンデュラスのサン

ペドロ・スーラに次ぐ、世界で2番目に犯罪の発生率が高い街としても知られる。

フアレスにはそのツイン・シティのエル・パソとともに、アメリカ市場に向けた工業製品を生産する大規模なマキラドーラと呼ばれる工業地帯がつくられている。1994年、メキシコとアメリカ・カナダとの間で北米自由貿易協定が締結されて以来、急速に発展し、国内各地から多くの人々が職を求めて流入し、郊外にスラムが広がった。マキラドーラは一般に3交代制で、交代時間に合わせて郊外の団地からバスがやってくる。女性労働者の割合は高く、母親たちは幼い子どもを連れて来て、工場脇の保育園に預けていく。地方出身の両親がマキラや関連の仕事で長時間家を空けている間、家に残された子どもたちのなかには地元の不良グループに入るものもあり、そこで武器の扱いを習い、さらにギャングの世界に誘われていくこともある。

フアレスから国境の橋を渡ると風景は一変し、エル・パソはアメリカ国内でも有数の治安のよい街である。フアレスの工業団地に進出した日系企業の日本人は、そのほとんどが治安のよいエル・パソ側に暮らしている。近年の治安の悪化で、フアレス市民でアメリカビザを取れる人はこぞってアメリカ側に移住した。

シウダー・フアレスは女性殺人の舞台として世界的に有名になったが、メキシコのなかでも特殊な街というわけではない。国境の街でなくても、麻薬密輸組織が勢力を張り合い、警察など公務員が汚職にまみれ、犯罪組織と癒着する地域では、女性が誘拐や強姦をはじめ犯罪被害に遭う割合が高い。男性中心の犯罪組織での暴力的な日常、武器が身近にある環境などが反映しているのだろう。

例えば現在、犯罪率ももっとも高いゲレロ州アカプルコは、太平洋側の有名リゾート地だったが、ゲレロ山中で生産されるアヘンやマリワナが出荷され、中国などから船で密輸される覚せい剤原料の陸揚げ地でもある。このような交通の要衝であるため、麻薬密輸組織間の抗争が絶えず、組織と関係す

る男性たちの間にばらまかれる金がセックス・ビジネスに流れ、女性への暴力ともつながると考えられる。

犯罪は犯した者勝ち

メキシコでは2006年、フェリペ・カルデロン前大統領が宣言した「対麻薬組織戦争」をきっかけとして、メキシコ革命以来ともいわれる暴力的状況がメキシコ全土に広がった。与党が国民行動党(PAN)から2012年に制度的革命党(PRI)のペーニャ・ニエト大統領に交代して以降、汚職はさらにひどくなり、暴力と治安の悪さは一部では悪化さえしている。

組織犯罪に関連する犠牲者数は、2013年に内務大臣ミゲル・アンヘル・オソリオ・チョンが「カルデロン前政権下で7万人近くの死者が出た」と発言して以来、その後の犠牲者数の推移はほとんど発表されていない。行方不明者数に関しても不明確で、政府の発表する数字は変遷しており、一番最近のものとしては、今年1月に発表された23,271人という数字がある。そのうち過去2年間に発見されたのはわずか102人で、うち72人が生存しており、30人が死亡していることがわかったにすぎない。

犯罪の不処罰率は97%以上と、信じがたいまでの割合である。犯罪は犯した者勝ちという現状だ。INEGI(国立地理統計局)の2013年のデータによれば、すべての犯罪のうち、警察に届け出たのはわずか9.9%で、さらにせつかく届け出ても、そのうちの62.7%しか捜査が開始されていない。すなわち、93.8%の犯罪は申告されなかったか、あるいは訴え出ても捜査がなされなかった。さらに捜査が行われたわずか6%のうち、その約半数(49.9%)は何の解決もみなかったという。つまり、犯人が捕まって処罰されるのは、わずか3%である。

女性への暴力は阻止できるのか？

メキシコは、国連による女性差別撤廃条約に基づき、2003年にシウダー・フアレスの現状にかんして国連事務局職員による訪問調査が行われた。これが世界初のケースだった。調査の結果、委員会から政府に対していくつもの勧告が行われ、それに基づいて法整備がなされた。

2007年、「女性への暴力のない社会のための総合法Ley General de Acceso de las Mujeres a una Vida Libre de Violencia」が施行され、2009年には「女性に対する暴力の予防及び撲滅のための全国委員会 Comisión Nacional para Prevenir y Erradicar la Violencia Contra Mujeres (Conavim)」が設置された。

Conavimは、女性への暴力が多発する地域に対して、「ジェンダー暴力警報Alerta de violencia de género」なるものを発令できる。これも国連の勧告に基づくものだ。今年7月に警報第1号として、メキシコ州の11の行政区に発令され、8月には隣接するモレロス州の8つの行政区に発令された。まるで暴風雨のような扱いだが、雨風と違って、待っていればそのうち止むというものではない。効果のほどは不明だが、とりあえず社会の注目を集め、警察や司法の不正や怠慢に対して警告を発する効果はあるかもしれない。

政府もまったく対策をしていないわけではない、ということだが、地域によっては政府より犯罪組織の方が大きな支配力を持ってしまっている現状では、絵にかいたモチに過ぎない。法による秩序の崩壊は、女性をはじめとする弱者を食い物にし、あらゆる人々の暮らしに影響を及している。

そのような絶望的な状況のなか、共感を集めているのが、犯罪被害者の家族の会だろう。シウダー・フアレスだけでも女性殺人の被害者の会は複数あるが、それぞれ脅迫にも屈せずに連帯し、運動を展開している。そのうちのひとり、マリア・ルイサ・ガルシア・アンドラーデは、母親とともに被害者の家族会「Nuestras Hijas de Regreso a Casa娘たちが帰宅



<http://radiotrece.com.mx/nuestras-hijas-de-regreso-a-casa/>

するまで」で活動しているが、自宅を放火され、殺人予告を受け、警察の護衛もあてにできず、子どもたちを連れてメキシコシティに逃れた。フアレスに残った母親は2か月後に銃撃を受け、かろうじて命を取り留め、娘を追ってメキシコシティに来た。マリア・ルイサ・ガルシアによると、「警察は被害者のためではなく、証拠を消して捜査ができなくするために働いている」「相手にしているモンスターは想像以上に巨大だということはすぐにわかった」と新聞のインタビューで述べている。

組織犯罪やマチスモによる女性への暴力を抑止していくために必要なのは、厳しい状況の中でたたかう市民運動に、国外からも共鳴し、メキシコ政府に対して圧力をかけていくことだろう。日本の大手企業はメキシコ各地に工場を建設し、安い人件費を利用してアメリカへの輸出を増やそうとしている。そのような地域には、地方から移民が流入し、スラムや赤線地帯が形成され、マフィアに誘拐された女性が売春を強要されているという現実がある。そのような現状に目をつぶることなく、人権侵害の実態を知り、改善を求めていくことが必要だろう。

エクアドルにて、2006年11月28日にエクアドル環境省の下で特定非営利活動法人バルサ・エクアトリアナ - ジェイピー (Fundacion Balsa Ecuatoriana-JP) を設立し、2014年8月まで代表理事として、現地で活動してきました。私がNGO設立をするきっかけとなったのは、自転車で南北アメリカを縦断している時に、ラテンアメリカに入り、ものすごいカルチャーショックを受けたこと、また、大自然や人のぬくもりを教えていただいたことからです。エクアドルを選んだ理由は、日本が、古代縄文時代に南米と繋がりがあるということを知り、伝統文化が残り、自然の宝庫だったからです。エクアドルは小国でありながら、アンデス地方、アマゾン地方、海岸地方、ガラパゴス諸島と多様な自然があります。そして多くの石油が採掘され、開発との狭間に立たされ、自然や伝統文化が破壊されてもいます。私たちのミッションは、古代文化を敬う環境保護団体として、歴史、文化、環境の調査を行い、コミュニティの伝統文化を尊重しつつ、自然環境と持続可能な発展社会の均衡がとれた平和な世界を作るため、中長期間にわたり、伝統技術保存、環境維持システム、教育、啓蒙また貧困地域の生活改善を行い、地域社会と企業と行政が共に助け合う環境にやさしい社会作りを目指すというものです。

最後の筏乗りたち (Villamil de playas市)

プラヤス市は、考古学者エバンス・エストラダ氏が狩猟をしているときにたまたま見つけた土器の破片をスミソニア大学に鑑定に出し、その後の調査で、エストラダ氏とアメリカの考古学者ベティメガーズ氏などは、その地域で発見された土器の様子が、日本の縄文土器と類似しているという論文(1968年)を発表しました。同時期に偶然にも日本では、古田武彦先生の魏志倭人伝の解説書も発表され、縄文時代に日本とエクアドルでは交流があったという縄文渡来説を唱えています。土器が発見された地域の近くの町プラヤスは、エクアドルで最後



材木でできている港

の海洋筏乗りが残っている場所で、それが消え去ろうとしていました。そういうこともあり、古代から続く伝統技術やアイデンティティを守るために活動を始めました。国立博物館や海軍の海洋博物館、文化省などにも協力していただき、スペイン征服以前の海洋古代舟の復元を行い実証航海する事業を立ち上げました。残念ながら舟は試験航海中に座礁し大破してしまい、そのプロジェクトは一時中断となってしまいましたが、多くのメディアに取り上げられ、エクアドル政府と一丸となり、伝統の大切さを問うことが出来ました。その後も、文化遺産研究所や厚生省などが保護に努めています。

マングローブの自然保護活動

その後、一団体のみでは活動の幅が狭いことを感じて、ネットワークの強化をするためいろいろな環境NGO団体にコンタクトし、グアヤキル湾内の約3300haをマングローブ保護区としている団体から返事が来て、その団体が管理している自然保護区の拡張事業(10869.53ha)に協力の要請がありました。自然保護活動は初めてでしたが2009年に参加することになりました。

その保護区に住む人々は、都市からの電気も水道も通っておらず、そこまでの唯一の交通手段は1日1便の不定期なモーター付きの小さなカヌーしか

ありません。そのカヌーには、鶏、食べ物、人などを満載し、少しでもバランスを崩したら浸水して沈んでしまうような乗り物で、ゆっくりと1時間半かけてマングローブの入り組む迷路のような河川を進んでいきます。1年以上にわたり、コミュニティとセッションを交わし、他団体とともに持続可能な環境と開発事業計画の作成に携わり、この場で活動のノウハウを学びました。

自然保護システム

マングローブは熱帯亜熱帯の岸沿いや河口など海水と淡水が交じり合う場所に生息し、マングローブ林に、プランクトンが発生し、それを追いかけて魚や鳥が集まり、海の生態系を形成します。温暖化の原因と言われている二酸化炭素を吸収する効果が高いと言われており、温暖化防止にとって欠かせない植物とされています。

エクアドルのマングローブ自然保護区は、少し特殊で、環境省から保護区認定地に選ばれるには、その近くに住むコミュニティが保護区を管理し、NGO団体又は大学などが技術アシスタントとして入らねばなりません。保護活動と交換条件に、保護区内での漁または採取の許可を認めています。わたしたちの活動内容は、マングローブ管理運営事業計画を作成し、違法の取り締まりとコミュニティの人々の生活改善などを行い、生態系と共存し、円滑に生活できるようにサポートをするものでした。



マングローブ保護区になるための経緯

エクアドルでは、マングローブの伐採についての法律は、2000年以前はありませんでした。多くの都市の家や埠頭が丈夫で腐りづらいマングローブの木を使って建てられていました。私たちが行ったコミュニティ（セリート・デ・モレーニョ村）のリーダーのヘロニモさんも、2000年以前は、マングローブを伐採し、グアヤキル市に運んで売り、それで生計を立てていました。また、エビの養殖所を作るために、多くのマングローブは伐採されました。しかし、1999年に中国から持ってきた稚エビからホワイトスポットウイルスが感染し、中南米のエビの養殖所は、瞬く間に大打撃を受け、瀕死の状態となりました。そのころには、エクアドルのマングローブは、既に半分以下に減少しており、危機感を持った政府は、マングローブの伐採禁止の法律を設立し、保護区条例を作ったのです。私たちの団体が行ったコミュニティは、保護区の第一人者となりました。ヘロニモさんのコミュニティは、グワヤキル湾内のマングローブ林の心臓にあたる中心に位置する人口約800人の比較的大きな村です。小さな入り江が複雑に入り混じった迷路のような川をグワヤキル市からカヌーで1時間半ほど進んだところにあります。マングローブ林の中には、20から30の小さなコミュニティが存在します。この地域のコミュニティは、約100年前に漁師たちがグアヤキルから移住してきたのではないかとされていますが、ヘロニ



とれたてのカニを食べる

モさんのコミュニティでは、住民が切り開いたエビの養殖所の中からプレインカ時代の様々な土器が発見されており、それ以前に先住民が住んでいたと思われる。

マングローブの伐採が禁止されることで、ヘロニモさんは職を失い大変でしたが、マングローブの自然の恵みである蟹や魚などを集めて都市で販売し生計をたてながら、リーダーとして支援集めに没頭するようになりました。また、コミュニティの住民にとっても、新しい決まり事で、価値観を変えていくのは大変でした。時には、違反をした同じ漁村に住む住民を警察に連行したり、近くにある養殖所の嫌がらせで住民が発砲されたりもしました。けれども少しずつですが、その活動が理解され、今まで支援が届かなかったコミュニティにもようやく、発電機やソーラーパネル、学校、警察署などのインフラが整備され、定期診療などがうけられるようになりました。

マングローブ保護区の委任活動は10年ごとの更新となっており、2000-2010年の第1期が満了となり、当団体も含み作成した第2期事業計画も無事に再申請の手続きが完了し、初めて環境大臣が直々にコミュニティを訪問し、その調印式を行いました。

モニタリング

私たちの活動は、計画書に乗っ取ったコミュニティ住民参加型の天然資源の持続的管理や社会環境の開発を目的とし月1回定期集会を開き、事業計画のプログラムを行います。主な活動の内容は以下の通りです。

1. コミュニティによるマングローブ林のパトロールとコントロール パトロールとコントロールについては、環境省から委任されたコミュニティが、漁業権やマングローブ林内の活動許可の権限を授かり、海上保安庁や環境警察などと連携を強化し、森の中で生きている漁民が違法採取やマングローブ林の伐採などを見つけた場合、ヘロニモさんに伝え、警察に連絡してもらい対応しています。



2. 魚（貝）と蟹の持続可能な漁 マングローブは、この地域に昔から生息をしており、マングローブの木の根の側に住処の穴を作り、夜行性で暗くなると穴から出てマングローブの葉や微生物を採食しています。ゲアヤキルでは昔からよく食べられており、週末に家族で集まりホームパーティなどをする時などにも食されます。持続可能な漁を行うために、保護区となったことで国の漁業研究所とより親密に事業を行える基礎ができ、コミュニティでの講習会や、蟹の生態調査の活動が漁民の協力により、コスト削減しながらより多くの情報を手に入れることができるようになりました。そのデータをもとに、蟹の産卵期や脱皮する時期を見定めて、年に1月ずつ禁漁としています。また、蟹の採取のデータから、年々サイズが小さくなってきており、雌の採取の禁止と雄の甲羅の最低限のサイズを決めてコントロールをしています。
3. コミュニティの組織能力の構築強化 コミュニティの社会環境開発について研修を行い、評価し、環境省に報告します。ヘロニモさんのコミュニティにかかわる団体が協力し合い、学校やコミュニティセンターで環境教育やリーダーシップ研修などを行ったり、大学の医学部と連携し、緊急処置対応ができるようにグループを

作り教えたりしていました。生活環境を改善するために、エネルギー省から各家庭にソーラーパネルや、グアヤキル市からはディーゼル発電機が支給されました。また、飲み水を確保するため、ドイツの団体から全住民が使用する水が貯蔵できるタンクが寄付されました。最近では、衛星ネット回線の会社と提携をして無料でインターネットも使えるようになりました。また、週4、5日の医師の定期検診も行えるようになり、警察署も作られ警官が2名配備されました。

これらが実現したのも、多くの住民から信頼を受けているヘロニモさんのリーダーシップが行き届いており、多くの村民が参加してくれた賜物だと思います。

追悼

帰国して、あっという間に半年がたったころ、エクアドルで共に活動している友人から一通のメッセージが届きました。それは、衝撃的なものでした。ヘロニモさんの謎の事故死でした。友人も詳しい状況は知らされていないようですが、昼間にボートで衝突し死亡したらしいということです。今まで何度もコミュニティに足を運びましたが、昼間に事故が起きたという話は、一度も聞いたことがありませんでした。昨年いた頃は、海賊が頻繁に出没しており、近くのコミュニティの人たちも、その村には行きたがっていませんでした。共に活動した友が亡くなってしまい、本当に悔やまれてなりません。

エクアドルの伝統は、特定の地域ではまだ生物多様性と人間の間バランスを維持し営まれています。これらのコミュニティは、環境保全の主要な鍵になる人々です。その文化を歴史、民俗学、言語学、考古学などの視点から調査・研究し国家文化遺産を維持するために、伝統的な漁業活動の回復・維持の活動を行っているのは当団体のみです。国連人間環境会議には、エコロジー開発の概念があります。開発と環境は相反するものではなく、この二つの側面は切っても切れない関係であり相補的なものです。

工業の成長は汚染や天然資源の荒廃を増加させ、その不安な未来から現在、世界的なガバナンスの状況で社会公正、経済効率と環境保全の均衡が取れるように協調の努力がなされています。

持続可能な開発は、現在の世代が将来を危うくしないためにも、天然資源の浪費や不必要に環境と人間を傷つけないように経済成長と環境の合理化をはかり、すべての人々のためのより良い生活条件を整えることを目指します。経済成長、バランス、社会向上と天然資源と環境のバランスを踏まえたステークスホルダーは市民の生活状況の改善を目的としています。

当団体は天然資源と自然環境を考慮し、利益の公平な分配を確保しつつ市民全体が参加して効率化するように推進します。

今後、活動を持続していくために、パートナーズ・ジャパン・YAMATE (www.pjy.co.jp) と手を組み、エクアドルのフェアトレード商品を販売して、その売り上げの一部をマングローブ保護活動資金とさせていただきます、継続していきたいと思っています。ぜひご協力お願いします。

Fundacion Balsa Ecuatoriana-JP
www.ecovida.jp

ウルグアイの土になった元日本帝国海軍兵

ウルグアイの首都モンテビデオの外れに1972年当時、九藤利男（きゅうとう・としお）という広島県出身の70代の日本人が住んでいた。亡命者だった。厳密に言えば、既に日本人ではなく、ウルグアイ人になっていた。九藤は1923年にモンテビデオを訪問した旧日本帝国海軍の軍艦浅間に乗り組んでいた海軍兵士だった。20代の若者だった九藤は仲間とともに上陸したが、街なかで仲間とはぐれたうえ、泥酔して眠ってしまった。眠りから覚めた時、帰艦時刻をとうに過ぎていた。艦上に待つ厳しい罰を怖れた九藤は帰艦せず、街に身を隠そうと決意した。

帰艦していない兵士の存在に気付いた浅間の上官は、直ちに「脱走兵が出た」とウルグアイ当局に通報し、逮捕を要請した。白人が多く、東洋人が全くと言っていいほどいなかった当時のモンテビデオに九藤の逃げ場はなかった。九藤は間もなく拘禁される。ところが、この事件が報道されるや、あまりにも珍しい出来事としてたちまち国中に知れ渡った。「脱走兵・九藤」は有名になり、社交界の話題にもなった。大統領夫人を頂点とする上流夫人らも「風変わりな日本人の事件」に関心を抱いていた。彼女らは、逮捕された九藤が浅間に引き渡されようとしているのを知るや、直ちに動き、浅間に戻りたくない九藤の意志を確認した。

大統領夫人を筆頭に夫人社交界は九藤のため人権擁護運動を開始する。大統領夫人は大統領を説得し、他の夫人らは国会などに夫たちを通じて働きかけた。この女性たちの熱意にほだされ、彼女らによって喚起された世論に後押しされた大統領は、九藤の身柄引渡しを拒否する。浅間は航海日程上の都合もあって、やむなく出港し去った。亡命者としてウルグアイ国籍を得た九藤はやがて、身を置いていた家で家事を任されていたスペイン系女性と結婚する。息子三人が生まれた。1972年当時、老夫婦となっていた九藤夫妻は息子たち、その嫁たちから守られて、幸福な余生を送っていた。

九藤は半世紀以上もウルグアイ社会で生きてきたため、日本語を完全に忘れてしまっていた。九藤の存在が第二次大戦後、日本で知られることとなったのは、1965年に海上自衛隊の練習艦隊がモンテビデオを訪れた時のこと。自衛官や同行していた日本の新聞記者らが艦上宴の場で「日本人に風貌の似た人物」を発見したの

である。

日本人のラ米亡命で最も有名なのは、1939年にメヒコに亡命し1966年9月メヒコ市で死去した演劇演出家・佐野碩である。海軍兵士ながら巷の人だった九藤の亡命は珍しい例だ。日本人ほど亡命の経験が少なく、したがって亡命に関する理解の薄い人民はいないと指摘されるが、このことは移住地の日本人にも現れている。

ボリビアの政治首都ラパスにある日本ボリビア会館で現地在住の邦人と座談会をもったことがある。その折、ラパス日本人会の井門泰会長（愛媛県出身）は、「国旗を背負って生きているのは兵士ばかりではない。私たちはボリビアで長年、日の丸よりも赤い<血染めの日の丸>背負って生きてきた。本当の日本人を見たければボリビアに来なさい、と言いたい」と明言した。40年近くボリビアに生きてきていた井門は、土地に馴染むはずの心を、変わらない日本人としての肉体のように、日本人として保ち守っていた。亡命は、心身への迫害という政治的圧力を受けて決行される場合が多いが、移住者も迫害されれば、亡命を考えることもあり得るだろう。

1972年当時ラパスに駐在していた日本領事によると、ボリビアの日系社会から出た亡命者は、スペインに去ったクワバラという日系二世の左翼作家だけのことだった。だが前年71年、やはり日系二世の詩人ペドロ・シモセ（下瀬、1940年生まれ）もスペインに亡命し、マドリードに住んでいた。詩集『ぼくは書きたいのに、出てくるのは泡ばかり』（1972年）は40年後の2012年、現代企画室から日語訳（日本語訳）が出た。

ボリビア在住の日本人は4000人を超えていたが、ほとんどが計画移住者だった。ラパスでの座談会では、ボリビア中東部の沖繩移住地、サンファン移住地など集団移住地は日本という島国の延長になりやすく、ボリビア人になりきるという精神改造がしにくいという意見も出た。これはまったくの少数意見であり、多数派の考え方は、「今後の移住は日本の国策として行なわれるべきであり、日本と海外移住地との結びつきを密接にしなければならぬ」というものだった。「今後は移住でなく海外就職と考えるべきだ」という意見もあった。ラパスの移住者たちがモンテビデオの九藤に会ったら、スペイン語でのどんな対話が可能になるだろうか、と思っただけのものだ。

【お知らせ：伊高浩昭著『チェ・ゲバラ 旅、キューバ革命、ボリビア』（中公新書）7月25日刊行。月刊LATINA 9月号（8月20日刊）に伊高浩昭執筆「鶴見俊輔とメキシコ」掲載】

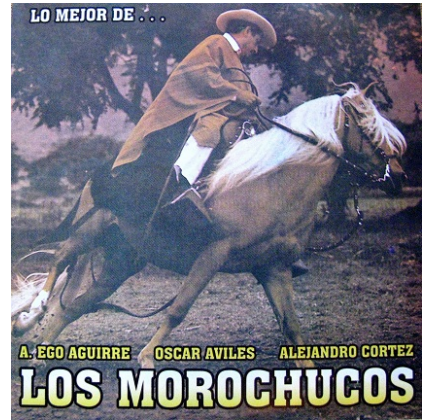
音楽三昧♪ペルーな日々 (第60回)

ペルーのカウボーイ チャランとマリネラ・ノルテーニャ

今回はペルーのカウボーイをめぐる音楽にスポットを当ててみたい。カウボーイといえばアメリカの西部開拓を担った男たちのイメージが強いが、ラテンアメリカ各地にも馬とともに人生のほとんどを過ごしたカウボーイたちがいた。有名どころを上げるとすれば、馬とともに移動中心の生活をしていたアルゼンチン・パンパの gaucho やベネズエラ・コロンビア国境に広がるジャーノ平原に生きるジャーネロがいる。それに対して定住派としてはメキシコのチャロなど代表格であろうか。彼らはまた即興の音楽に長けた人々としても有名だ。gaucho が愛したミロンガやジャーネロたちのホローポは、それぞれの国を代表する音楽として長らく愛されてきた。チャロも同様に、メキシコを代表する歌謡ランチェラを生み出す母体となり、その衣装はマリアッチの象徴として身につけられるなどメキシコ音楽に欠かすことの出来ない影響を与えている。また、アルゼンチンの gaucho 文学の金字塔とも言われる「マルティン・フィエロ」は、同国で聖書の次に読まれている本としても名高い。

ペルーのカウボーイは、チャランと呼ばれる。チャランは沿岸部、主に北部地域で活躍する調教師であり騎手でもある。知名度としても gaucho やジャーネロたちには大きく劣るが、ソンプレロやポンチヨだけでなく馬具にいたるまで独自の伝統にこだわったペルーのチャランは、その颯爽とした姿はムシカ・クリオーヤのアルバムのジャケットなどでも繰り返し使われるなど、ペルー沿岸部を代表する誇るべきシンボルのひとつとして愛されている。彼らは移動生活をしていただけではないので、gaucho やジャーネロというよりはチャロに近い。

このカウボーイ、チャランたちが乗っていた馬は、実はペルーの固有種で非常に特殊である、ということほとんど知られていない。カバーヨ・ペルアノ・デ・パソと呼ばれるこの馬は、征服期に持ち込まれた後品種改良が続けられ、独立期にほぼ今の形になったといわれる。歩いたり走ったりするとき



に、馬に乗っている人が上下に揺れない特殊な走り方をする馬なのである。騎乗した人が水平移動するように走る馬というのは実際見たり体験するとかかなり驚くものだ。この特殊な馬の血統を守るためにペルー政府も力を入れているという。当時は、綿花やサトウキビなどの広大な農場を見回る際に好んで使われていたようで、小柄な馬であれど、長距離でも踏破する体力と騎手の疲労が少ないことが大きな利点であったようだ。現在は、北部沿岸三県のピウラ、ランバイエケ、ラ・リベルターで多く飼育されている。

さて、前置きが長くなったが、そのチャランたちと縁が深い音楽といえば北部沿岸地方で愛されたマリネラ・ノルテーニャである。マリネラ・ノルテーニャについてはこれまでも幾度か紹介させていただいた。ペルー北部発の舞曲であり、舞踊コンクールによって踊りの技術革新が著しい音楽だ。コンクールによってこの芸術的な舞踊の伴奏に特化することを求められたマリネラ・ノルテーニャは、ある種ペルー音楽の中にあって特殊な位置を占めている音楽といってもいい。近年はコンクールの影響でもっぱらバンダ(ブラスバンド)の演奏で踊られることが一般化している。しかしもともとはアルパ(ハーブ)とギター、カホンなどで演奏されてきた音楽で、古くはアルパの胴体をカホン代わりに打楽器として叩いて

演奏されるなど、シンプルな民衆音楽であった。このアルパの胴体を叩くスタイルはカホンの原型とも言われたが、現在はほとんどみられない。そもそも北部沿岸地方でアルパ自体がほとんど使われることがなくなってしまったことが、このスタイルが失われた大きな要因である。元来この音楽は庭先での宴会や飲み屋などで踊られたパーティ音楽の花形であった。

マリネラ・ノルテーニャの踊りにおけるサパテオと呼ばれるステップは、馬を模しているとも言われる。そう考えて改めて踊りを見ると、激しくサパテオしながらも上半身は滑るように動くマリネラ・ノルテーニャの動きは、まさにカバーヨ・ペルアノ・デ・パソの特徴を兼ね備えていることがわかって面白い。駆け足をしても騎手がほとんど上下に揺れることがないこの馬の特徴が見事にマリネラ・ノルテーニャに結実しているのである。

このことが関係しているのかどうかは分からないが、チャランたちはマリネラのステップを馬に踏ませて踊らせる調教を伝統的に競い合ってきた。いかに馬に美しいマリネラを踊らせるか、というコンクールまであるのはまさに驚きだ。二組の騎手たちによる神業的な操馬術の共演がなせる技である。

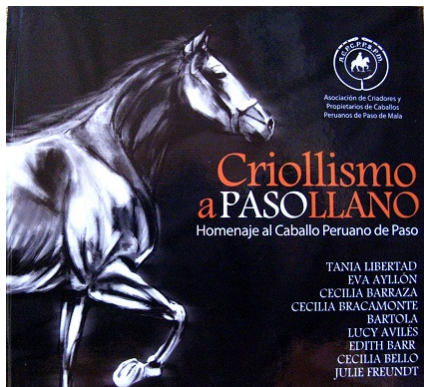
さらに、馬同士のマリネラだけでなく、男性は馬に乗り、女性は馬に乗らずにペアを組んでマリネラを踊るというスタイルも存在する。ハンカチを持った素足の女性とポンチョとソンプレロをかぶった馬上の騎手が向き合って踊る姿は、ファンタジーにでも出てきそうな、現実のものとは思えない不思議な感慨を生む。この騎馬と女性のマリネラは今では観



光ショーなどで見る事ができる。観光でトウルヒーヨなどに行った際にはぜひ一度見てみて欲しい。チャランと言われた時にペルー人が思い描くイメージの多くはこの馬を操る騎手と女性の踊っている姿かもしれない。また、あまり見る機会はないが、女性が馬を操り、男性が踊るというスタイルのものもあるそうだ。その際、騎手となった女性をアマソナスと呼ぶのが面白い。馬のサイズが小柄であるこのカバーヨ・ペルアノ・デ・パソの特徴が、馬と人が相対して踊るこの特殊なスタイルを生み出す一つの大きな要因であったのかもしれない。

こうしたチャランたちを歌った曲もムシカ・クリオーヤにはたくさんある。中でもバルスの貴婦人と呼び愛されたムシカ・クリオーヤ最高のシンガーソングライター、チャブーカ・グランダは、チャランとカバーヨ・ペルアノ・デ・パソに捧げる名曲をたくさん作曲した歌手として知られている。とくにホセ・アントニオはチャランに捧げられた名曲として今なお愛され、折にふれて歌い継がれている名曲だ。

また、2013年にはカバーヨ・ペルアノ・デ・パソに捧げられたコンセプト・アルバムが製作されている。ムシカ・クリオーヤを牽引しているルシー・アビレス、ジュリー・フレウンとウィリー・テリーらによる企画で、ムシカ・クリオーヤの名だたる女性歌手たちによる新録だ。カバーヨ・ペルアノ・デ・パソにちなんだ曲をいっぱい楽しめるこのようなアルバムは異色であるとしても、チャランとカバーヨ・ペルアノ・デ・パソが、ペルーのクリオーヨ文化と色濃く結びつき、そして彼らの誇りとして歌い継がれてきた一端を垣間見ることができるだろう。(水口良樹)



「世界をつなぐ子どもの本」展

網野真木子

この8月、国際子ども図書館で「世界をつなぐ子どもの本」と題して、2014年国際アンデルセン賞受賞作家の作品とIBBYオナーリスト図書の展示が行われました。IBBYオナーリストとは、国際児童図書評議会(IBBY)に参加する各国支部が自国で出版された児童書から外国に紹介したい作品を選ぶ推薦図書のリストです。「イラストレーション作品」「文学作品」「翻訳作品」の3部門で一冊ずつを選出、今回は52の国と地域から集められた150冊が展示されました。ラテンアメリカからはどのような作品が選ばれたのでしょうか、私は手にとるのを楽しみに上野へ足を運びました。スペイン語圏ではアルゼンチン、ボリビア、チリ、エクアドル、メキシコ、ベネズエラの6カ国から計15冊、その中で印象に残った作品を紹介したいと思います。

まずボリビアの絵本『La increíble tía Dorita』は、コンピュータと部屋にこもりっぱなしの男の子の家にやってきた「とんでもない」ドリータおばさんの話。彼女は目が見えないのにへっちら、男の子をガイド役に散歩に出ます。すると、街の様子を説明する彼の方が外の世界の面白さにめざめていく…少年をパソコン中毒から引きずり出してしまうドリータおばさんの個性の輝きはハンディキャップという語を忘れさせます。エクアドルの『Colorín Colorado』(めでたしめでたし)は寝坊助のコロリン君が主人公。その名の通りいつも学校のお話の時間の最後にしか間に合わない彼は、どうしたら遅れずにすむでしょう…単純な展開ながらユーモラスな姿に思わず微笑んでしまいます。同じエクアドルの『Invisibiliflú』は、言葉そのものの面白さを伝える手のひらサイズの詩の本。Si el que llora es un llorón, el que lee es un león…(泣く人は泣き虫、読む人はライオン)といった軽妙な言葉遊び歌など、この国の読書推進活動にとり組んできた作者の熱意がこめられているようでした。一方、アルゼンチンの絵本

『El verdadero negocio del Sr. Trapani』は、不思議なペットショップを開く謎の人物をめぐる話で、驚きの結末はこの国特有の批評精神の発露でしょうか。大人も一緒に楽しめそうです。アルゼンチンの翻訳作品『Un amigo para siempre』も心に残る一冊でした。アンゴラ独立運動に参加して投獄された作家が一羽の小鳥と辛抱強く友情を育んでいくという、実話にもとづく話。ブラジルのコラサンティの原作を、前回のアンデルセン賞受賞作家アンドウルエットが翻訳しました。

より年長向けの作品では、鳥にまつわる神話を集めたチリの『Aventuras y orígenes de los pájaros』が印象的でした。人類学者である著者の文体は読みやすく、やわらかな色調の挿絵も美しい本。さいごに、異彩を放っていたメキシコの絵本『Zezolla』にふれておきましょう。Zezollaはバジーレの説話集におけるシンデレラ物語の主人公の名で、テキストは作者がシンデレラ説話のさらなる源を探り、語り直したものの。灰色～黒の暗いトーンに貫かれた挿画とともに、人の本性に宿る残酷さを隠そうとしないこの作品は、ディズニーのシンデレラの対極に位置づけられるものでしょう。世界中で暴力の絶えない今、子どもに向けてこのような本を作った作者の思いを知るためにもじっくりと読みたいと思いました。

以上、かけ足の紹介でしたが、会場の本をつうじて、今日私たちの共有する問題に対してそれぞれの仕方で真摯に向き合う作り手たちの姿勢が伝わってきたことはたしかです。帰り道の公園で父子とすれ違いました。「疲れたから電車の中で寝ちゃおうかな」というお父さんに、「だめだめ、ぜったい寝ちゃだめ」と懸命な男の子。その姿に頬がゆるみ、子どもの求めるものに私たち大人が最良の形で応えられたら、という思いが広がった一瞬でした。

*文中に挙げた作品を含む、150冊の書誌を載せたオナーリストカタログ(英語版)はIBBYのホームページ<http://www.ibby.org/270.0.html> からダウンロードできます。(部門別国別アルファベット順に記載)

ワカモレ

GUACAMOLE

今回は、メキシコでもっとも有名なソースのひとつ、ワカモレ（グアカモレ）をとりあげます。

皆さんご存じの通り、日本では英語に由来する「アボガドディップ」の名で知られていますが、本来の名はグアカモレです。

グアカモレは、ナウアトル語の「AHUACATLMOLLI」がもとになっています。アボカドを意味するAhuacatlとソースを意味するMolliというふたつの単語があわさったものです。スペイン語ではアボカドのソース（SALSA DE AGUACATE）と訳せるのですが、メキシコではグアカモレと呼ばれるようになりました。

おいしくて栄養満点のこの果物の名の語源もナウアトル語にあります。

ラテン語の学名Persea Americanaは、ナウアトル語で「鞆丸の木」を意味します。木になっているときの果実の形が似ているからです。

アステカ神話によると、トルテカとアステカの重要な神であるケツァルコアトルが、グアカモレの作り方をトルテカの人々に教え、彼らがメキシコのほかの谷に住む人々につくりかたを伝えていきました。マヤ語では、アボカドをOONといいます。

グアカモレのオリジナルなレシピでは、アボカドをペースト状になるまでつぶし、刻んだトマトやレモン果汁、塩、トウガラシを加えます。

グアカモレには非常に多くの作り方があり、コリアンダーやタマネギ、コショウを加えたり、賽の目状に切ったアボカドをマヨネーズと塩であえるだけだったり……。アボカドをすりつぶすだけという地域もあるし、水やクリームを加えて独特の風味を加える例もあります。



メキシコは世界最大のアボカドの生産・輸出国で、大消費地でもあります。

日本では少しずつ、アボカドを食べる習慣が広がり、すしでも活用され、刺し身のように醤油をつけて食べることもありますね。

グアカモレの変色を防ぐには、つくったグアカモレの上に種を置いておきます。それによって、酸化を防ぎ黒く変色するのを遅らせることができます。

メキシコではグアカモレは、タコスをはじめ、多くの料理に添えられます。ケーキやサンドイッチ、スープ、アイス、さまざまなシチューにも使います。

手早く簡単に料理ができて経済的。しかもとてもおいしい。アボカドをそれぞれの家に常備することをおすすめします。

私が子どものころ、母は台所にアボカドを欠かしたことがありませんでした。グアカモレをつくるのは私たち兄弟の役目でした。さまざまな煮込み料理に添えて食べたものです。

メキシコの食卓には絶対欠かせないソースであり、数千年前から貧富に関係なくメキシコ全土で食べていました。

ユカタンのアボカドは、日本で売っているものより大きく、4倍ほどの大きさの実もあります。皮が薄く、種が小さいのも特徴です。

■材料 4人分

- ・アボカド2個
- ・トマト中 2個
- ・細かく刻んだコリアンダー 大さじ2杯
- ・細かく刻んだタマネギ 大さじ1杯
- ・細かく刻んだハラペーニョ 大さじ1杯（辛いものが苦手ならば入れなくてもよい）
- ・レモン（ライム）果汁 大さじ2杯
- ・塩、コショウ

■作り方

- 1) アボカドの殻と種子を取り除いたあと、ペースト状になるまでつぶす（種は使うため、捨てないこと）
- 2) レモンを搾る。種がはいらないように注意する。
- 3) コリアンダーを細かく刻む
- 4) ハラペーニョを細かく刻む
- 5) トマトを細かく刻む。
- 6) 深い容器で上記のすべてを混ぜ、塩コショウで味をととのえる。グアカモレが変色しないように種を入れておく。すぐに食べないなら冷蔵庫に保管する。

ベネズエラーコロンビアの国境問題

8月21日、ベネズエラのマドゥーロ大統領はコロンビアとの国境を閉鎖し、1400人のコロンビア人が強制送還された。またベネズエラ在住のコロンビア人が大挙して帰国するなど、両国は緊張したが、このたびエクアドルで首脳会談が開かれ、解決への糸口ができた。

ベネズエラが国境封鎖という手段に出た背景には、ベネズエラのガソリンの35%がコロンビアに密輸されているという事情があった。石油やガソリンの密輸はチャベス前政権時代からあり、ベネズエラ側の安い石油がベネズエラ軍高官らによってコロンビアに密売され、コロンビアの準軍事組織を潤していた。が、原油の値段が暴落（1バーレル\$ 100から\$ 40に）したため、今回の強引な措置に出たものとみられる。

また、ベネズエラとコロンビアの国境地帯は、石油だけでなく麻薬やその他の密輸のルートにもなっており、これらの問題をどのように解決して行くかが大きな課題となる。（Inter Press Service 24 sep 2015 より）

メキシコ ジャーナリストが殺害される

今年、メキシコ市のアパートで、ベラクルス州のジャーナリスト、ルベン・エスピノサが4人の女性とともに射殺された。市民活動家や、学生、社会運動を取材して、脅迫され首都に亡命しなければならないようになってすぐのことだった。

ジャーナリストが脅迫されて亡命するケースは、対麻薬戦争を始めた元カルデロン大統領時代（2006-2012）に多くなり、また実際に襲われる事件も増えた。今年に入ってから225件のジャーナリストへの襲撃があり、うち6人が殺害されている。メキシコ全国人権委員会(CNDH)によれば、2000年から88人のジャーナリストが殺害されている。最も状況が深刻なベラクルス州では18人が殺害されている。

首都に来て、未知の土地で生活を安定させることは難しい。これら国内亡命ジャーナリストの平均の1カ月の収入は232ドルから284ドルで生活は苦しい。それに加えて今回のエスピノサの殺害は、首都に逃げても安全ではないという衝撃を与えた。人権と表現の自由の活動を行っている憲法19条の会代表は、告発するものがいなければ、組織犯罪や腐敗が横行するばかりなので「ジャーナリストへの攻撃は国全体への攻撃と同じこと」と述べている。（BBCMUNDO/2015/08/04より）

メキシコ アヨツィナパから1年

ゲレーロ州イグアラ市で教育大学生43人が拉致され行方不明になった事件から1年経った。だが、事件の真相はまだ明らかになっていないままだ。

メキシコシティやイグアラ市などで真相究明と正義を要求する大きなデモが繰り返された。チアパスでもサパティスタ民族解放戦線EZLNが行方不明の43人に連帯する集まりを催した。国連は、この事件に関して完全な真相究明を要請するよう決議した。（La Jornada Internet 27 sep 2015より）

9月12日、京都駅前で「京都国際ステーション2015」に初めて参加しました。2日間のイベントのうち1日でしたが、終日来場者は途切れず、クイズラリーのおかげもあり、来場者との会話も生まれました。「グアテマラって国の名前なんですか?」「コーヒーの銘柄じゃないんですか?」など新鮮な反応もありました。クイズの3択でチチカカ湖とアティトラン湖があったのですが、ほとんどの人がチチカカ湖を選ぶなど、グアテマラの知名度はまだまですた。

長テーブル1つのスペースにポーチやビーズ製品、2016年のカレンダーを販売しましたが、一番人気はにわりの鍋つかみ! あっという間に売り切れしました。ビーズ製品は多くの方が手にとって、丁寧に作られていること、色が鮮やかなことで興味を示してくれました。カレンダーはホンジュラスに住んでいたことがある方が迷わず購入してくださいました。

終日参加の事務局長の大西さん、エクアドルの鉱山問題から親しくなった一井さん、関西での活動にはなくてはならない成田さん(娘の大事なお友達)、元代表で今は小水力発電の開発に忙しい古谷さんも力を発揮してくれ、夜には生ビールでお疲れ様会もしました!

これからもグアテマラの女性たちの民芸品をもっと紹介していく場を持っていきたいな、と思いました。2016年カレンダーもなかなかの出来栄です。ぜひ、会員の皆さんのご協力、よろしくお祈りします。(嘉村早希子)

次回「そんりさ」印刷作業は東京で1月9日(土)、
発送は関西で1月16日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

| | |
|--------------------|-----------------------|
| Vol.153 コロンビアを伝える旅 | Vol.149 コロンビア・アワ民族 |
| Vol.152 グアテマラ視察報告 | Vol.148 ナルコ・メヒコ |
| Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊 | Vol.147 サパティスタ武装蜂起20年 |
| Vol.150 メキシコのアフリカ系 | Vol.146 グアテマラ視察報告 |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も
しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

57万5850円

<グアテマラ基金>

54万8349円

(2015年9月現在)